

カンタ、リコ、ケイコの突撃レポート

国土交通省シンポジウム「関係人口とつくる地域の未来」

関係人口と地域がより良い関係性を築くために

令和2年1月10日（金）に国土交通省はシンポジウム「関係人口とつくる地域の未来」（主催 国土交通省、後援 内閣府、総務省、農林水産省）を東京都千代田区の手町サンケイプラザにおいて開催しました。

ここでは、「ライフスタイルの多様化等に関する懇談会」（国土交通省が令和元年7月から開催）で検討を行った『関係人口の実態把握』の試行調査の結果や関係人口の可能性、新傾向などが披露され、パネルディスカッションを通じて関係人口をめぐる新しい動きが議論されました。その様子をカンタとリコとケイコの3人がレポートします。

本レビューは、「カンタとリコの訪問記 特別番外編 マンガでわかる！カンタとケイコが学ぶ『関係人口』」に登場するカンタ、リコ及びケイコがレポートを行うというテイストでとりまとめました。同時リリースされている“まんが”との連携企画です！

ケイコ：まずは、studio-L 代表 山崎 亮さんの特別講演「コミュニティデザインと活動人口」を私がレポートしまーす！



「コミュニティデザインと活動人口」 studio-L 代表 山崎 亮さん

山崎さんからは、コミュニティデザイナーとして地域に関わっている具体例を通じて、地域づくりにおける活動人口の重要性、活動人口を増やす仕掛けなどが紹介されました。



山崎さんによると、活動人口とは地域でまちづくりの活動に関わっている人の数であるとのこと。その背景には、コミュニティデザインを通じて、地域づくりのお手伝いをする中で、自分たちの地域を自分たちが変えていこうという活動をする人たちの重要性を言葉にしたいという思いがありました。

紹介された事例の一つが大阪府の泉佐野丘陵公園。新しい公園づくりを考えるというもの。当初の図面には全体の20%程度の面積しか計画が記載されておらず、残された山林の部分を地域コミュニティが主体的に公園に変えていく、公園づくり自体を遊びながら行うというもの。毎年30名応募で選ばれるパークレンジャーが公園づくりを行い、今では約300名が様々な取組を行っているそうです。当初、取組期間は10年間であったものの、取組が好評であったことから、さらに10年間延長されています。また、取組開始から10年が経ち、1

期生は、当初参加時は 65 歳から 75 歳であったことから、現在は 75 歳から 85 歳になっているのですが、筋肉隆々で日焼けしており、とても健康的に過ごしているそうです。地域の未来を考えるとときには超長寿社会を見据えて、その取組が健康に寄与するののかというのも大切な視点であり、活動人口や関係人口がつながっていくことにより、健康で長生きができる状況を一緒につくり出すことが重要だということです。

定住人口の増減に一喜一憂する自治体は多いですが、どんな種類の人口を増やしていくのかをイメージしながら、戦略的に取り組むことが重要とのことでした。

地域活動に興味がなかった地域の人たちが、デザインを切り口に自分たちの地域の未来を少しでも変えていこうという意識を持ち、活動人口に転じていくことが必要であるとのこと。新しい学びやつながりができることで、いろいろなことに挑戦したい気持ちが出てくる。そうするとチームビルディングが進み、地域で活動していく人が増えていく、これが地域づくりであると語られました。

地域づくりというと、道路や橋梁、公園などのハード整備を思い浮かべますが、それは半分の側面に過ぎません。「地域」はそこに住んでいる人々全員の「人生」が積分されてできています。「行動」は「意識」から生まれているので、「意識」を積分すれば「行動」、そして「生活」となり「人生」となる。その「人生」を積分すると「地域」となるとのことでした。

コミュニティデザインは、人々の意識を変え、つながって行動を起こすことを後押しします。コミュニティデザインのワークショップを通じて、人生が変わったと思う人が増え、その人たちが地域で生活していくことが、地域を変えていくことになるのです。

地域の間人がつながる中で、協力や競争の関係が生まれ、活動人口としての意識が醸成されていきます。そのきっかけとなる刺激は、地域の人だけではなく、関係人口からも与えられます。関係人口との関係を具体的にどのように築いていくか、その際にどのようなアイデアを持っているのかが重要であると総括しました。

リ コ：ケイコ、すごいじゃない。よくまとめられていたよ。“住んでいる人の人生を積分すると地域となる”、深い言葉だね。次は、私の番ね。「ソトコト」編集長 指出一正さんが行った基調講演「関係人口の新傾向」をレポートするね。



「関係人口の新傾向」

株式会社 sotokoto online 「ソトコト」編集長 指出一正さん

指出一さんは、関係人口の提唱者の一人とされています。2010 年代、若い人たちは、ただの旅では飽き足らず、関わりを求めていると感じていたことから、関係人口という言葉の提唱をはじめたということです。

指出一さんからは、彼が実際に携わった事例の紹介がありました。



まずは、指出さんがプロデューサーの一人として関わっている「有楽町マイクロフード&アイデアマーケット」。2019年12月にオープン、人と人の関係を案内する「関係案内所」として、日本各地を有楽町に集約し、有楽町から関係人口を増やしていくプロジェクトです。

次に、「SDGs ローカルツアー」。環境省が提唱する地域循環共生圏に関連して、次世代のSDGsリーダーを養成するためのものです。地域循環共生圏は、地域資源を最大限活用し、自立・分散型の社会を形成、コミュニティを豊かにすることがコンセプトであり、関係人口もその中に位置づけられているとのこと。関係人口としての感覚を持ちあわせている人たちは総じて「SDGs」的であるとのこと。

また、指出さんは、行政からの依頼により関係人口をつくる講座を開催しています。その一つが和歌山県田辺市の「たなコトアカデミー」。首都圏の若者が田辺在住の30代、40代のローカルプレーヤーと一緒にまちづくりを進めていく講座です。受講生はワーケーション制度を活用し、好奇心を持って地域づくりに参加しています。何よりも、地元の新聞社がバックアップしているので、関係人口というワードが加速度的に広まっているとのこと。地元のローカルメディアとの協働で関係人口を広めることが重要だそうです。

もう一つは、「しまコトアカデミー」。2012年から島根で開催されている講座です。8年間にわたる取組により、都市部からの関係人口を巻き込んで500人近いコミュニティを形成。なかには、受講をきっかけに島根にUターン、自らの趣味を活かし、休耕田を利用した金魚養殖に取り組むとともに地元で有名なイチジクの栽培や6次産業化にも取り組んでいる方もいるようです。

このように地元に関わって、自分のやりたいことと地元が大切にしていることの両方に取り組む若者が関係人口の講座から生まれている。そのことが重要ということです。

しまコトアカデミーからは、もう一人の受講生の紹介がありました。その方は、トヨタが三重県に所有する広大な社有林を有効活用して世界最高クラスのクオリティのドッグランをつくっているそうです。みんなが幸せになるためには、そこに住んでいる人だけに頼るのではなく、アイデアを持っている人が各地に分散していくことが重要とのこと。関係人口が地域との関係を深めていくことで、ふわっとした当初の概念がソリッドなものになりつつあるとのこと。

また、「地域内関係人口」と「流域関係人口」の事例も紹介されました。

地域内関係人口は、山崎さんが提唱している活動人口に近い概念。世田谷区の尾山台ではまちに関わる人を増やすための取組が行われ、駅の利用者と商店街との接点が増えることにより、地域内関係人口として近隣駅の住民を巻き込んだコミュニティが生まれているそうです。

また、流域の中で地域づくりを進めている人たちが、お互いの関係性を深めていく現象が確認されているとのこと。それが「流域関係人口」。山形県の最上川の流域では、各地域に魅力的でかっこいいプレイヤーがおり、お互いが協働しながら自分たちの地域づくりに取り組んでいます。流域内で仲良くなれるイベントが各地で開催されており、「おしゃれな広域連携」が広がっているということでした。

カンタ：“おしゃれでカッコいい”ということが重要なんだね。
講演の最後は僕だね。2人に負けないように頑張るよ。明治大学の小田切先生が行った基調講演「国交省アンケートから見る関係人口」をレポートするよ。難しそうだけど全力を尽くすよ。



「国交省アンケートから見る関係人口」明治大学農学部教授 小田切 徳美さん

小田切先生からは、今年度、国土交通省が三大都市圏に居住する18歳以上を対象に実施したインターネットアンケート調査の結果に基づき、関係人口の実態についての解説がありました。



関係人口という用語は、浸透しつつありますが、定量化は十分に行われてこなかったそうです。定量的な把握に当たっては、関係人口という人たちが地域で何をしているのか、そのことを確認するためにアンケートを行ったとのことでした。

今回のアンケートは、三大都市圏の18歳以上の居住者、約3万人を対象とした試行的なものであって、来年度はさらにボリュームのある調査を国土交通省で予定しているようです。

地域を訪問して関わりを持っている関係人口は、三大都市圏居住者の約2割となっていて、実数換算すると1000万人という膨大な数になるようです。

これらの関係人口が地域の中で何をしているのかというと、地域での飲食や商品の購入、趣味活動をしている人が多いようですが、地域の行事に参加したり、地域で働いたり、地域のホスト役を務めているような人まで存在しており、その活動にはグラデーションがあることがわかりました。これらの多様な行動は、趣味・消費型、参加・交流型、就労型、直接寄与型と類型化されました。

一般的な関係人口というと、産業の創出や地域づくりプロジェクトの企画・運営、協力等を行うような「直接寄与型」をイメージしますが、この「直接寄与型」は関係人口の約1割であり、三大都市圏人口に対しては2～3%程度、人口に換算すると100万人を超えているそうです。

また、地域との関係性が深まるにつれて人数は少なくなる傾向があるとの説明がありました。関係人口の職業、訪問頻度、時間、距離は多様であり、非宿泊関係人口が半分以上を占めていることから、これが伸びしろであり、施策展開のポイント一つであるとのことでした。

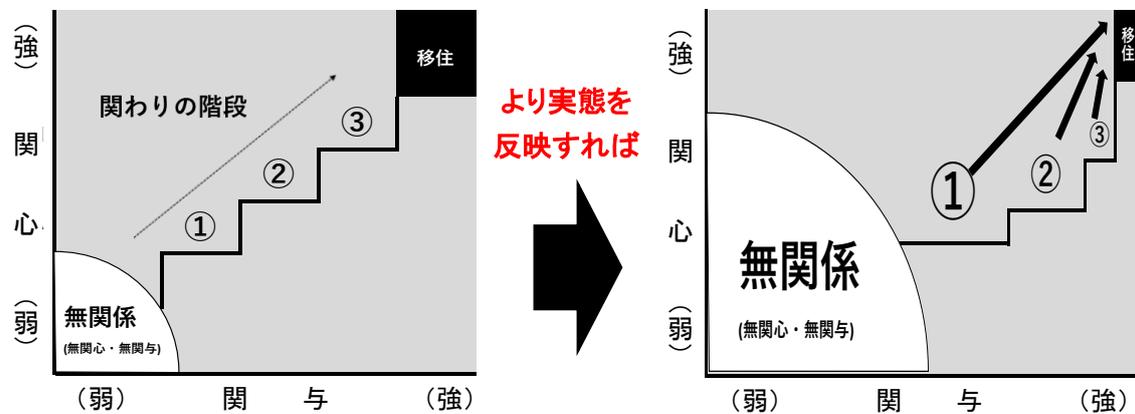
関係人口が地方を訪問する際、半数以上に同伴者がいることも、明らかになった新たな真実だそうです。同伴者がいるということは、仲間が仲間を呼ぶというように関係人口が関係人口を創り出す可能性があります。

また、都市内関係人口が膨大に存在していますが、地方を訪問する関係人口も確かに存在していることが明らかにされました。

訪問先の地域との関わりが深いほど、自分の住んでいる地域の活動にも積極的に参加していて、中にはホスト役まで務めている人が存在しているそうです。

関係先を移住先として魅力を感じるかということについては、趣味・消費型は約 45%、参加・交流型は約 57%、直接寄与型は約 62%の人が「魅力を感じている」と回答しているとのデータが示されました。これは関係人口全体の約 6 割となる膨大なボリュームだそうです。

これらを踏まえると、関わり方の段階の図は修正が求められているとのこと。第 1 段階に比べて第 2 段階が小さな存在だとみることができ、関係人口すべてが移住しなくてはならないというものではありませんが、実はこのファーストステップから直接移住をするという可能性もあるとのこと。



カンタ：三大都市圏に居住する関係人口は1000万人を超えているのか。すごいね。でも、近場に関わっている地域内関係人口の割合が多いようだね。人の流れをさらに外側に向けていくことが重要だね。次は、パネルディスカッションだよ。



リコ：そうだね。誰がリポートする？

ケイコ：私がリポートする！

リコ：ケイコ、パネルディスカッションは、いろいろな人が話すから大変だよ。

カンタ：じゃあ、みんなでリポートしようか。

リコ&ケイコ：そうしょー！



パネルディスカッション

パネルディスカッションでは、講演した3名に加え、さらに岩手県八幡平市の関さん、NPO 地域おこしの多田さん、(株) カヤック Living の松原さんが加わり、まず3名から自己紹介を兼ねて関係人口に関わる取組についてご紹介がありました。関さんからは「起業志民プロジェクト」や「副業受け入れプロジェクト」などの市の事業、多田さんからは十日町市池谷集落における関係人口としての関わりや地域おこし協力隊として移住後の地域づくり、松原さんからは移住と関係人口創出のためのマッチングサービス「SMOUT」についての説明がありました。



その後、会場参加者からの同時進行で出される質問や意見も参照しながら、小田切先生のコーディネートによるディスカッションが始まりました。

(小田切先生)

最初に、関係人口の新潮流として、副業をどのように位置づけるのかという論点があります。

(指出さん)

副業のほうが入りやすい地域が増えています。副業と関係人口の相性は良いと思います。

(小田切先生)

関係人口の定義については、会場からいくつか質問が出ています。活動人口との関係性についての質問があります。

(山崎さん)

活動人口は地域内活動人口という枠の中で考えることが多いですが、地域内活動人口にも様々なタイプの地域との関わり方があります。プロジェクトの運営や事務局まで務める直接寄与型が、活動人口と近い概念です。

はじめは地域に住んでいる人だけを考えていたのですが、それでは狭いと思うようになり、関係人口の考え方を取り入れて、距離が離れていても活動人口になり得るのではないかなと思うようになりました。

(小田切先生)

参加者からの質問の中には、国際的な関係人口というものがありました。



(松原さん)

関係人口になった瞬間、移住とは異なり、マインドシェア的なものに関わってくる。日本の地域に対して、興味、関心を強めることは海外からでも可能です。私たちもインバウンド SMOUT

というサイトをつくっています。

海外の方が日本をイメージするときは、東京ではなく、例えば田園風景等のローカルの姿をイメージしているはずで

成田から直接ローカルに人を導くためには、ローカルの地域のみなさんが、世界に向かって地域の情報を発信していくことが重要です。

単純なインバウンド観光は減ってきており、地域でボランティアをしたり、農作業をお手伝いするなど、インバウンドの中には暮らしの体験ツアーに参加する人が増えていると聞いています。それは確実に関係人口としてみることができます。

(小田切先生)

本題に戻りまして、「関係人口とつくる地域」というテーマに入ります。その際、非常に大きなテーマとなるのが関係案内所。つまり、関係人口と地域とのつながる場が関係案内所になります。まず、指出さんに関係案内所について説明していただければと思います。

(指出さん)

関係案内所は造語です。人と人との関係を案内する場所が今の時代において求められていることから、その言葉が出てきました。関係案内所という看板を掲げれば良いのではなく、様々な人がやってくる環境やきっかけがあることが関係案内所の定義です。地域全体が関係案内所的に機能している都市やコミュニティがあるのではと思っています。

(多田さん)

私は、関係案内所的なことを実践していると思っています。池谷集落のイベントに来た人が、十日町市の山奥に古民家を購入して、二地域居住をはじめています。その人からは、多田さんのところに行ったのがきっかけだったとお話をいただきました。

また、「十日町雪まつり」というのがありますが、地元の旅行会社と連携し、ただ表面的な観光だけではなく、地元密着の交流ができる企画をしています。ただ表面的に観光に来るだけではなく、地域の人とつながりができるように機能することが関係案内所に求められていると思います。



(小田切先生)

つながるを作るというのは、具体的には何をするのでしょうか。

(多田さん)

とりあえず一緒に飲む機会をつくったり、共同で同じ体験をする機会をつくることですね。

(小田切先生)

先ほど、指出さんは地域全体が関係案内所となる可能性があると思いました。一方で、参加者のアンケートには、具体的な場が重要だという意見がありました。2つの考え方が出てきており、案内所の意味が曖昧になりはじめているのですが、このあたりを整理していただけますか。

(指出さん)

まず、シンプルに場が重要です。すごく狭くても、駅舎の中でもいいですが、そこを関係を案内できる場所にどう変えていくのかという観点から、認知や蓄積を図ることにより役割が広がっていきます。

(小田切先生)

物理的な場所を関係案内所として、ある程度整備していかなければならない。それを使って地域全体の雰囲気が変わったときには、地域全体が関係案内所となるという解釈でしょうか。

具体的な場にはどのようなものがあるって、そして地域の雰囲気をどう変えていくのでしょうか。

(関さん)

地域の方までつなぎきれていないのが実情です。関心を持って何か地域の力のなりたいという人はいるのですが、地域側の受入れ体制が整っていない。

ただ、起業市民プロジェクトの受講生がシェアハウスをつくり、ビジネスでもない観光でもない人がそこを経由するようになりました。

地域おこし協力隊も絡んでいますが、そこが関係案内所の役割を果たし始めているところです。



(山崎さん)

具体的な空間はある方が良い。その先に地域全体が関係案内所になるということがある。街中の様々な人たちが関係案内を始めると、結果的に関係案内所的なところが生まれたり、そういうのが必要だという世論が出てくるようになって、気づいたら地域が丸ごと関係案内所になっている。場があった方が力を持つというのは同感です。ただし、場がないから駄目だとか、まず場をつくらなければならないというのは本末転倒ですので、関係案内を意識していく、そこに関わる人たちの数を増やしていくことからスタートするとハードルが低くなると思います。

(松原さん)

ネット上で関係案内所を運営していますので、あくまでも地域に入る一歩手前を担っているという認識です。オンラインの果たす役割は大きく、実際の関係案内所となる地域の人と移住や関係人口に興味がない層をつなげるということがインターネットにはできていると思っています。インターネットを通じて、ゆるやかな関係を築いた上で、地域の関係案内所に呼び込む、ワン

ステップを置くことが重要です。実際に移住者が出ていることを考えると、その仮説は正しいのではないかと思います。

(小田切先生)

国土交通省の「住み続けられる国土専門委員会」において、「つながりサポート機能」という概念を整理しました。このつながりサポート機能は、全国レベル、地域レベルにおいて必要であり、二重構造又は三重構造が必要があるとされました。松原さんが取り組んでいるのは全国レベルのつながりサポート機能、多田さんたちが取り組んでいるのは地域レベルのつながりサポート機能であり、その両者が有機的につながっているという理解で良いでしょうか。

(松原さん)

私たちは、都市部のサポートをしています。移住と関係人口の違いは、移住する人は地域への関心が高いのですが、関係人口というのは、ただ地域で働いてみたいとか地域に行ってみみたいとか、ゆるい気持ちだと思います。地域に行ったときに、地域の皆さんから「来て！来て！」と言われると、少し戸惑ってしまう訳です。そういったときに、地域の関係案内人に受け渡す仲人のような役割を担っています。



(小田切先生)

次に、会場からの意見として、関係人口と移住を結びつけるのは、強い違和感があるという意見がありますが如何でしょう。

(指出さん)

間（あわい）と考えてください。淡水と海水の真ん中の汽水域、生き物を育むには最高な大切な場所です。移住の前のゆりかごのような状態として、関係人口というジャンルが育まれる場所、間（あわい）的な場所が必要です。

「しまコトアカデミー」など、行政の皆さんから依頼されているものは、その地域のことを考えてくれたり、好きになったり、想いをよせてくれる人たちを増やしていくことを前提としたもので、必ずしも移住がゴールではありません。ただ、中には移住を決める人もいます。よって、否定はしませんが、直接の道筋に関係人口は当てはまらないというのが私の見解です。

(関さん)

地域に魅力があれば移住に至るとい人もいると思うので、行政としては、魅力のある地域づくりをしっかり行っていこうと思っています。

(小田切先生)

多田さんは、関係人口初期からいきなり移住された訳ですから、みんな自分みたいになるは

ずだと思いませんでしたか。

(多田さん)

全然思いません。田植え体験を企画したのですが、すぐに疲れてしまうライトな人もいます。そこに「もっとやれ」とか言ったら、嫌われて二度と来なくなってしまうし、そういうのを求める必要はないと思う。

地域側の実利としても、他の地域から継続的に関わってくれる人が一定数いた方が有り難いと思っています。都会にいるから果たすことができる関係人口としての役割がありますので、多様な関わり方をしていただけるのが有り難いと思っています。

(小田切先生)

関係人口は非常に大きなグラデーションがあるということが、国土交通省のアンケート調査でも実証されました。関係の深化を無理に誘導する必要はないということですね。しかし、中には自らステップアップするような人も出てくるということですね。

その際、受入れ側の体制整備が必要ではないかとの意見も出されています。

(指出さん)

非常に重要なポイントです。これが濃淡を分けています。地域に興味を持つ人たちは、どの地域も好きであったり、逆にどの地域も知らなかったりします。人間は自分のこと以外は興味がないですから、人や地域のことはほとんど知らない。よって、差別化を図れない状況では、その地域に迎え入れてくれる人の存在が重要となります。



関係案内人的な人たちや関係案内をする組織が明確にある方が良いと思います。

(小田切先生)

そういった特徴を持っている地域の共通点は何ですか。

(指出さん)

活動人口が多い地域です。

(山崎さん)

地域の魅力は人の魅力が大きいと思います。活動人口が多い地域ほど地域の魅力を高めていて、その地域の魅力は人の魅力であるからこそ、その人と一緒に何かやりたいと思い、移住に結びつくんだと思います。

(多田さん)

十日町市は大地の芸術祭などを行っていますが、それを実行している地域のプレイヤー、活

動人口は比較的多いのだと思います。移住者も一定程度いますが、活動人口が多いことがプラスに働いていると思います。

(小田切先生)

議論が冒頭の山崎さんの講演に戻ってきました。活動人口が重要だということです。地元の活動人口とはどのようなタイプの人なのでしょう。

(山崎さん)

これまでは、コミュニティは地域コミュニティを指していました。でも、今の若い人たちには、地域のイメージはない。SNS、趣味等でつながっているテーマコミュニティが中心です。活動人口を考えると、地域の町内会で活躍している人をイメージすると、やり方を間違えてしまう。活動人口で思い浮かぶのは、趣味や興味が一致する仲間たちがサークルやコミュニティを通じて、面白い、一緒に笑える活動を始める人たちです。これに少しでも地域の人たちから感謝される活動をできれば上々です。



地域コミュニティを意識し過ぎず、自分たちの興味のある範囲で集まって、無理のない範囲でおもしろいことをやって、それでは飽き足らず、ちょっとだけ地域から感謝されることまでシフトした人たち、これが活動人口の理想型ではないでしょうか。

(指出さん)

地味に見えがちなベッドタウンのほうが今おもしろい。岐阜県各務原市では、若い人たちが「各務原暮らし委員会」という委員会をつくりました。ほとんど人が歩いていないようだった公園に、一日4万人を集めるマルシェを開催するまでになりました。

若い人が各地でマルシェを開くのはおしゃれな生存確認だと思っています。生きる張り合いとなり、地域の中で自分たちが暮らしていく楽しみにつながっているのです。活動人口とは、自分たちで面白いな、おしゃれだな、かっこいいな、笑えるなということを自発的にできる人たちやそこに仲間が入っていける集団だと思います。

(関さん)

自分ができることを行うことで、活動人口が広がるし、コミュニティも大きくなると思います。

(多田さん)

活動人口には二種類あると思う。仕事とは関係のない部分で、楽しいことをやろうと盛り上がる活動をしている人たちと、もう一つは、仕事そのものを活動としていて、金儲けだけが目的ではなく、ソーシャルビジネスやコミュニティビジネスというように、活動により経済的に回るような状況をつくるようなものです。具体的には、農産物や地域の産品を加工して販売し、収益を増やして雇用を生むようなものです。

地域づくりと地域おこしは、楽しいことに加えて、お金が回っていかないと続かないというのを実感しています。

(松原さん)

SMOUT に登録している地域の人が、活動人口だと思います。その中には、強い活動人口が存在しています。プロジェクトを企画し、興味のある人を集め、移住させるという驚異的なゲストハウスのオーナーがいます。この人の場合は、自分のところに戻ってきてほしいとか、おいしいご飯を食べさせてあげたいとか、この地域を好きになってほしいとか、個人的な欲求からスタートし、地元の人につながっています。人を引きつける原動力となっているのは、その人の生き様がとても素敵であることです。人と人が引き合っただけで関係人口が増えていくと思います。地域に思い出す人ができたということが、その地域の関係人口になったということだと思っています。活動人口とは、自分の生き方を明確に持っている人が多いように思います。



(小田切先生)

関係人口を語る上では、活動人口が重要であるとの議論になってきました。しかし、ここで問題があります。「〇〇人口」という表現が多すぎます。定住人口、関係人口、活動人口。混乱しますね。言葉を提案された2人がいらっしゃいますので、活動人口と関係人口の関係性を整理していただきたいと思います。

(山崎さん)

全部、関係人口に統合すればよいのではないかと思います。活動人口と提唱したのは、経済学に経済活動人口という言葉があるからです。でもこれは、労働人口とほとんど同義です。よって、働いている人と楽しいことをしている人の両方を取り入れるという意味で、経済という言葉は抜いて、活動人口としました。

(指出さん)

山崎さんが言う活動人口には、関係案内人がぴったり当てはまる。関係人口では、地域で活動している関係案内人がまさに活動人口なのではと思います。

(小田切先生)

私も、そのように整理できると思います。

参加者の方からの最後の質問です。ひとつは、関係人口という言葉の使い方に違和感を感じる。人格が感じられない。「人口」という言葉を使ってしまったためにそうなったのではないかと。

また、ふたつは、指出さんの講演の中で重要視される関係人口は、SDG s の雰囲気と似ており、重なるという問題提起がありました。こちらについてもさらにお聞きしたいと思います。

(指出さん)

関係人口は、何となく冷たい言葉に感じますが、これは議論を進めていくためには非常に重要な言葉だと思います。いい言葉だと感じる人がいる反面、冷たさを感じる人がいるということは、議論が生まれ、議論が詰まっていく、その過程で関係人口の定義が肉付けされていくということです。

関係人口という言葉が英語に訳すと、connected mind となります。想いを寄せたり共感するという温かさを残したものです。山崎さんが提唱されているコミュニティデザインも共感から生まれる行動だと思います。共感から生まれる行動というのはSDG s のすべての項目に当てはまります。

関係人口は、その場所に想いを寄せたり、その地域に住めないけどその場所の人が好きだということ。その場所の人たちのことを考えるということは未来を考えることです。SDG s 的な感覚と関係人口は補完し合い、共鳴しあっています。

(小田切先生)

パネルディスカッションを閉じるのにふさわしい言葉であったように思います。最後に議論を3点にまとめます。

一つは、関係人口とつくる地域。それには関係案内所が必要であるとの論点が出てきました。まずは物的な場を確保することであり、世代や地域を超えた様々な人たちがごちゃ混ぜになることが必要である。単なる場ではなく、地域の雰囲気につながっていくことが示されました。

次に、関係人口と地域を結び付けるには、活動人口の存在が重要となります。最近改めて公民館活動や社会教育が再評価され始めていますが、様々な方々が寄り合うことによって地域の当事者意識が自然と生まれて、そこから活動人口も増えてくるのでしょう。

そして三点目。関係人口には、副業との関係、地域内関係人口、流域関係人口、さらにはSDG s との連携性といった新たな傾向や潮流が出てきています。

そういう意味でこの「関係人口」は、現在も発展・成長している概念であり、この言葉を改めて、皆さんとともに大切にしていきたいと思います。

(パネルディスカッション 了)



リコ：なんとか、レポートできたね。

カンタ：ケイコちゃんも頑張ったね。

ケイコ：そうかなっ！
これをきっかけに関係人口に興味を持つ人が
増えればいいなー。



(おしまい)